

日本線虫学会ニュース

Japan Nematology News

目次

◆会長挨拶（真宮靖治）	1
◆1999—2000年度役員選挙開票結果（選挙管理委員会）	2
◆事務局から	
1998—1999年度第2回評議員会・編集委員会合同会議開催される	3
1999—2000年度新役員体制	3
1999年日本線虫学会第7回大会のお知らせ	3
◆記事	
パラグアイ滞在記（清水 啓）	8
おわびと訂正	9

会長挨拶

真宮靖治（玉川大学元教授）

木々の新緑が輝く季節です。緑豊かな国土をあらためて見直す時季でもあります。

さて、今回2期目の会長を引き受けるに当たっては、その責任の重さに逡巡したところですが、学会を維持し発展させるための責務は、前期にも増して大きいと自覚しております。引き続き会員の皆様のご協力、ご支援をお願い申し上げます。

学会運営上の当面の課題は、会員数の維持・増加、学会誌の充実・発展であり、まさに学会存立の基盤に関わる問題に依然として直面しております。学会として4期目に入る現時点において、まだまだ基礎固めの段階にあることを認識して、柔軟な対応で臨むことを心がけてまいります。今後、総会場で皆様にお諮りする議題も多くなることでしょう。

日本線虫研究会以来主流となってきた農林業中心の線虫問題は、なお現学会の中心的位置づけになること変わりませんが、学会として取り組む対象の範囲については、今後は「線虫学」の境界領域の拡大という学問進歩の現状を色濃く反映したものになることでしょう。例えば、線虫学的内容的变化のきっかけとして、生物多様性の重要性の認識、分子生物学を基礎とした系統分類学の発展、遺伝子情報の解読とその応用などをあげることができます。後生動物中最多の種数をもつ線虫について、生物多様性の視点は、生物資源として、また生態系構成要素としての役割を解明するうえで大きな意義をもっています。線虫の系統分類を明確にすることは、宿主となる植物や動物との相互関係を理解するうえでの重要な基礎となります。また、地球上における種の分布の現状を、歴史的経過を背景にして考察することを可能にします。遺伝子情報

の解説は、生物学に計り知れぬ進歩をもたらしますが、病虫害対策としての抵抗性賦与技術の開発などは身近な効用として期待できます。クローニングは現実の技術ともなっていることであり、線虫の関わる場面のあることは十分に予想されます。

このように、線虫学は、その範囲がますます広がり、学問分野のボーダレス化傾向の例外ではありません。一方でこうした多岐にわたる学問領域を含む体系としての線虫学を構築することは可能であり、また必要なことでしょう。日本線虫学会の将来像をこのように位置づけることは飛躍しすぎかもしれませんが、こうした方向への前進を可能にする人材、すなわち会員の増えることを願うばかりです。

最近、私も遅ればせながらインターネットになじむようになってきましたが、世界各地の線虫学会のホームページへのアクセスでいろいろな情報を居ながらにして得ることが出来る便利さに感じ入っています。どうしても彼我の学会比較をすることになってしましますが、その国際性、学会誌の充実度（論文数や、課題対象の幅など）については大いに刺激を受けています。学会員数ではあまり合わない相手であっても、線虫学の普及度というか、研究者の層の厚さで差のあることを知らされています。わが学会の一層の発展が望まれます。なお、日本線虫学会のホームページはまだ立ち上がっていませんが、現在準備中であり、やがて学会PRの場として、また会員への情報提供の場として大いに役立つことが期待できます。また、できれば国際的な発信にもなるようにしたいものです。

前号の学会ニュースで、国際線虫学会連合（IFNS）が主催する第4回国際線虫学会議の開催地候補選定が進められている

ことお知らせしましたが、IFNSの評議員（日本からは石橋氏と真宮がでている）による2回にわたる投票の結果、僅差でカナリー諸島のTenerifeに決定しました。次点は南アフリカのPretoriaでした。

Tenerifeはヨーロッパ線虫学会（ESN）による推薦であり、2002年開催に向けての準備が、IFNSとESNによって今後進められることになっています。同地は北アフリカ沿岸の大西洋上に浮かぶスペイン領カナリー諸島にあり、観光地としても知られたところですが、会員の皆様には今から参加のこと心するようにしては如何でしょうか。

本ニュースの紙面で紹介されているように、新しい事務局体制、編集委員会構成などが決まりましたが、その任に当たられる方々には、お忙しい本務に加えて、学会のための業務にもご尽力くださいますようお願い申し上げます。

1999—2000 年度

役員選挙開票結果

選挙管理委員会

3月18日に標記選挙の開票を行った結果、下記の方々が選出されましたので報告します。なお、所属は開票時点のものです。

[会長選挙]

当選 真宮 靖治（玉川大農）

次点 近藤 栄造（佐賀大農）

[評議員選挙]

当選 水久保隆之（農研センター）

近藤 栄造（佐賀大農）

皆川 望（農研センター）

二井 一禎（京大農）

百田 洋二（北海道農試）

佐野 善一（九州農試）

石橋 信義 (佐賀大農)
山中 聡 (SDS バイテック)
荒城 雅昭 (農環研)
三輪 錠司 (日本電気)
次点 白山 義久 (京都大理)
(上田康郎、吉田るり子)

武内 克義 (SDS バイテック)
編集委員長
近藤 栄造 (佐賀大農)
編集幹事
岩堀 英晶 (九州農試)
相場 聡 (農研センター)
奈良部 孝 (北海道農試)

事務局から

1. 1998 年度第 2 回評議員会・

編集委員会合同会議開催される

標記会議が平成 11 年 3 月 16 日 (日) 午後 6 時～9 時農業研究センター A 地区 2 号館 (つくば市) で開催されました。討議内容及び結果については学会誌 29 巻 1 号でお知らせします。会議終了後、3 月末日に佐賀大学を退官される石橋信義元会長の慰労会を行いました。

2. 1999—2000 年度新役員体制

1999—2000 年度の評議員の意見集約を行い、事務局・役員体制を次のように決定しました。会計監査委員候補者は、9 月開催予定の総会でご承認を戴きます。会誌編集は第 29 巻から新しい編集委員会で編集を担当します。また、ニュース編集は今号 (17 号) より編集委員から選出されたニュース編集小委員会が担当します。

事務局長

水久保隆之 (農研センター)

会計幹事

伊藤 賢治 (同上)

庶務幹事

相場 聡 (同上)

会計監査委員 (候補)

高木 一夫 (日植防)

相川 拓也 (森林総研)

選挙管理委員

樋田 幸夫 (ロープ・ラン油化アグロ)

1999—2000 年度編集委員

荒城 雅昭 (農環研)

BOLLA, Robert I. (Saint Louis Univ.)

二井 一禎 (京都大農)

GIBLIN-DAVIS, Robin M.

(Univ. Florida)

石橋 信義 (佐賀大農)

近藤 栄造 (佐賀大農)

三輪 錠司 (日本電気)

皆川 望 (農研センター)

百田 洋二 (北海道農試)

小倉 信夫 (森林総研)

PLATZER, Edward G.

(Univ. Calif., Riverside)

佐野 善一 (九州農試)

白山 義久 (京都大理)

多田 功 (九州大医)

山中 聡 (SDS バイテック)

ニュース編集小委員会

(編集委員から選出)

荒城 雅昭 (農環研)

小倉 信夫 (森林総研)

1999 年日本線虫学会

第 7 回大会のお知らせ

1999 年度本大会を下記の通り開催します。大会に関するお問い合わせは下記大会事務局までお願いします。

1) 大会事務局

二井 一禎

京都大学大学院農学研究科

地域環境科学専攻微生物環境制御分野

TEL: 075-753-6060

FAX: 075-753-6173

Email: futai@kais.kyoto-u.ac.jp

①講演申込み、②大会参加費の振込、③懇親会費振込、④エクスカージョン参加申込み、及び⑤会場宿泊申込みは大会事務局まで。講演要旨は受け付けません。会場は京都市の中心部から離れておりますので、夜間小集会、エクスカージョンに出席される場合は大会会場に宿泊すると便利です。宿泊を希望される方は大会事務局へお申し込み下さい。なお、大会事務局は大会会場以外の宿泊所の斡旋はいたしません。

2) 講演要旨送付先

講演要旨は7月16日(当日消印有効)までにコピー1部を添えて、〒305-8604 つくば市観音台3-1-1 農業環境技術研究所 線虫・小動物研究室 荒城 雅昭(電話・FAX: 0298-38-8316) あてお送り下さい。誤って大会事務局に送付しないようお願いいたします。

3) 日程

9月9日(木)

13:00~14:00 総会

14:00~18:00 一般講演

18:15~21:00 懇親会

9月10日(金)

9:00~12:00 シンポジウム

「天敵細菌パスツールアを用いた
ネコブセンチュウ生物防除の展望と問題点」

座長 石橋 信義(佐賀大農)

①「パスツールアの生物学」

奈良部 孝(北海道農試)

②「線虫防除効果に及ぼす環境要因の影響
—カンショのサツマイモネコブセンチュウ防除を中心に—」

立石 靖(九州農試)

③「実用性と今後の課題」

上田 康郎(茨城農総セ)

④「生物農薬としての実用性評価」

三平 東作(千葉県農試)

13:00~17:00 一般講演

17:15~19:00 夕食

19:00~20:20 夜間小集会

「エレガンスとワインの夕べ」

ワインを飲みながら、最新の話題をうかがう場を設けました。

座長: 神崎 菜摘(京都大農)

「モデル実験動物としての線虫C. エレガンス: 過去、現在、未来」

三輪 錠司(日本電気)

「演題未定」

安達 宏(ライオン)

9月11日(土)

9:00~12:00 エクスカージョン

「京大・上賀茂試験地見学ツアー」

4) 会場(大会・懇親会)

関西セミナーハウス

〒606-8134

京都市左京区一乗寺竹ノ内町23

電話: 075-711-2115

交通(5・6ページの会場案内図を御参照下さい)

(1) JR京都駅から

(1)-1 地下鉄烏丸線北山駅(約16分)下車。タクシーで約10分。

(1)-2 市バス5系統(約50分)「修学院道」下車。徒歩約15分。

(2) 京阪出町柳から

(2)-1 タクシーで白川通りから一乗寺下り松を経て曼珠院の北。約20分。

(2)-2 叡山電車「修学院」下車。徒歩



会場案内図：京都駅～会場



会場案内図：会場周辺

5番のバスで、「修学院道」バス停下車。そのままバスの進行方向（北向き）に歩き、2つ目の信号で道を横断し、そのまま喫茶店サンルイの横の道を直進する（東向き）。突き当たりに鷲森神社の入り口がある。そのT字路を左に曲がり（北向き）、すぐ次の道を右に曲がり（東向き）直進するとほぼセミナーハウスに到着します。この間、徒歩約15分です。

約20分。

金はあるが時間の無い人には(1)-1を、逆に時間はあるが、お金が無い人には(1)-2をおすすめします。

5. 参加費

大会参加費 2,000 円

懇親会費 6,000 円（当日 7,000 円）

エクスカッション（未定）

なお、エクスカッションの費用は参加人数により異なりますので、当日徴収いたします（2,000 円程度の見込み）。

6. 参加及び講演申し込み

大会参加及び講演を希望される方は、参加費を添えて1999年7月16日（消印有効）までに大会事務局宛お申し込みください。送金は、京都銀行修学院支店 145-3086281（口座名：線虫学会京都事務局、代表 二井 一禎）をご利用下さい。また、

同封の葉書に①講演の有無（講演代表者名）、②懇親会参加希望の有無、③エクスカッション参加希望の有無、④夜間小集会参加希望の有無をご記入の上投函下さい。

7. 講演発表

講演者は本会正会員に限り、1人1題の発表とします。講演時間は討論を含め1題15分を予定していますが、申込数により変更することがあります。講演に使用する図表は35mmスライドとし、1題につき10枚以内として下さい。

各スライドの光源側に、講演番号、演者名、挿入方向（矢印または赤線）、映写順を示す番号を付けて下さい。

8. 講演要旨の作成

講演要旨は、B5版横書き、1行45字、全体700字以内を目安に作成して下さい。要旨には、1行目から日本語で演者名、続けて括弧（）内に所属、1字空けて演題、1字空けて上記事項の英文表記を記載して下さい。本文は行を改めて次の行から始めるものとします。上下余白

映写順序



を2.5cmとして下さい。講演要旨集は送付いただいた要旨を写真製版して作成します。見本（付図）も参考にして下さい。講演要旨集は大会開催時に参加者に配布するとともに、日本線虫学会誌 29 巻2号に掲載されます。

9) プログラム

大会プログラムは本年8月発行予定の本学会ニュース 18号に掲載します。

10) 宿泊

大会会場の関西セミナーハウスにはツイン10室、トリプル13室、5名用の和室1室があり、大会事務局が9月9日は40名分、10日は30名分の宿泊を押さえています。各部屋にバス、トイレがついています。20名以上の団体割引により、1人5,500円で宿泊可能です（食事は含みません）。数に限りがありますので、お早めに大会事務局までお申し込み下さい。部屋割については大会事務局と相談下さい。

（水久保隆之）

【記 事】

パラグアイ滞在記

清水 啓（国際農林水産業研究センター）

皆様お早うございます。こちらは夜の8時です。もう朝晩めっきり冷えてきて夏も終わろうとしています。ご挨拶がまるであべこべのパラグアイに来て早半年が経過しました。国際農林水産業研究センター（JIRCAS）の「南米諸国における大豆の高位生産・利用技術の総合的開発研究」プロジェクトの生産環境分野の課題の病虫害の発生生態と防除技術の開発の中で大豆の線虫害の研究に携わっています。昨年6月赴任当時は冬に入っており、研究環境の整備にほとんど費やし、本格的に仕事を始め

たのは本年1月からでした。私はパラグアイ東部のブラジルに国境を接するアルトパラナ県イグアス市にありますJICAのパラグアイ農業総合試験場（CETAPAR）に籍を置いております。4haの圃場と研究室、実験室、線虫分離室の3室をお借りし、日系のバイリンガルの秘書のお嬢さんと同じく日系の実験助手の高校生の男の子の3人で言葉にも不自由なしに楽しく毎日を送っております。設備は日本から持ち込んだ1,000万円の機材と4輪駆動車があり、研究環境としては申し分ありません。赴任直後の立ち上げ時はいろいろとインフラ整備に苦労しましたが、現在ではそれも落ち着いて、文献のないこと位を除いて満足しています。

パラグアイの大豆は不耕起栽培により平均3t/haの高収量を上げています。大豆栽培地帯はパラグアイとブラジル国境を流れるパラナ河沿いに発達した玄武岩起源の肥沃なテラロシャ土壤（赤色土）の上にあり、北からアマンバイ、カニンデジュ、アルトパラナ、イタプア4県にまたがっています。今年に入って、この4県の大豆圃場の線虫調査をしました。その結果、一番多くでる線虫はラセンセンチュウ、ついで、ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ、ニセフクロセンチュウ等です。ダイズシストセンチュウは今のところ検出されていません。実際被害と直結している線虫はネグサレセンチュウとネコブセンチュウです。

前者は4年前JICA/CETAPARの専門家の小野木静夫氏が一時帰国時に標本を持ち込まれ、農環研の皆川望室長（現農研センター）によりミナミネグサレセンチュウ *Pratylenchus coffeae* と同定されて、その後マリーゴールドの栽培等でだいぶ線虫害を押さえてきましたが、まだ

衰えを見せず拡大の方向にあります。被害は圃場に黄色のパッチが現れ、周囲と比較して草丈が著しく低いことではっきりその被害が判ります。

後者は本年1月～2月にかけてJIRCA Sの短期招聘で来られた農研センターの奈良部孝氏（現北農試）によりサツマイモネコブセンチュウ *Meloidogyne incognita* とジャワネコブセンチュウ *M. javanica* がいること、ダイズに寄生する種は後者であることを確定していただきました。

もう一つ今問題にしているのは *Rotylenchulus* sp.です。圃場にパッチ状に草丈の極端に低いところがあり、そこから寄生線虫としては本種のみ検出されました。現場では病害らしきものはみられず、対策に苦慮しており、今後接種実験により、本種の関連性を追いたいと思います。因みに本線虫は文献によりますと熱帯から亜熱帯のアフリカ西海岸やメキシコ湾沿いの北米南部でダイズに被害を与えている報告があります。

ダイズシストセンチュウはブラジルとアルゼンチンに発生しており、レースも前者で7州に9レースで抵抗性品種は3品種あり、後者で2県に3レース見つかっています。ブラジルとアルゼンチンには年に1、2度いく機会があり、その線虫研究者とダイズシストセンチュウの研究の進展状況と日本での現在までの成果について、情報の交換など交流を深めています。ポルトガル語とスペイン語はからきしだめなので、つたない英語で苦労しております。

私が印象に残ったことを一つお話ししてこの報告を終わりにしたいと思います。ある試験場を訪れた際、シストの分離を見せてもらいました。水道につなぐホースも、泥をかき混ぜるピーカーもありません。飲

料水の空きペットボトルの上を切ってピーカー代わりにし、さらに小型の水を満たしたボトルの腹を絞って水を出し、それをふるいに注いでシストを集めていました。それでも研究者は皆明るく、楽しそうに仕事をしているのには本当に頭が下がりました。何もなくても工夫で、仕事はできるものだなあと今更教えられた思いです。研究環境の整った日本ではとても考えられない光景でした。

おわびと訂正

日本線虫学会ニュース No.16 の3ページ、三輪錠司氏の記事「線虫 *C. elegans* の全ゲノム解読によせて」の第3段落に文章の欠落がありました。正しい第3段落は、次のようになります（欠落部下線）。

「Sulston がゲノム解読に必要な資金を獲得してゆく過程を見聞きすると、官が民の金を吸い上げ再分配する「スタテック」なシステムと民と官あるいは民と民が組んづ解れつぶつかりながら金の流れが決まる「ダイナミック」なシステムの違いがよく分かる。両者には一長一短あり、バランスが大事である。不況の中でますます前者に傾斜しがちな日本にも後者を育て支える仕組みがもっと真剣に考えられてもいいのではないか。さて、本題に入ろう。」

また、同じ記事の8ページ、注9の Sanger Centre の Website のアドレスが間違っていました。

誤 : <http://www.sanger.ac.jp>

正 : <http://www.sanger.ac.uk>

以上おわびして訂正します。

(荒城雅昭)

[編集後記]

- ◆新しい役員体制のもと、日本線虫学会ニュースの編集体制も新しくなりました。小坂 肇・串田篤彦・立石 靖の角編集担当にはたいへんお世話になりました。荒城・小倉の新体制（ニュース編集小委員会）となりましても、これまで通りのご協力をよろしくお願いします。
- ◆今号は 1999 年度学会大会のお知らせを中心に、手持ちの原稿で編集しましたので、これまで通りのスタイルでの発行となりました。今後、日本線虫学会ニュースにふさわしい内容とスタイルを追求して参りたいと考えていますの

で、会員の皆さんのご意見をお待ちしています。

- ◆日本線虫学会ニュースの原稿を随時募集しています。身近な線虫の話題、諸会議の報告、学会または会員への提案等どのような内容でも結構ですので、下記ニュース編集小委員会までご連絡ください。

- ◆次号には 1999 年度学会大会プログラムが掲載されます。大会事務局長に代わりまして、会員各位の振るってのご参加、講演申込みをお願いします。

(荒城雅昭)

1999年5月25日

日本線虫学会

ニュース編集小委員会発行

編集責任者 荒城 雅昭

(ニュース編集小委員会)

農業環境技術研究所

環境生物部微生物管理科

線虫・小動物研究室

〒305-8604

茨城県つくば市観音台3-1-1

TEL : 0298-38-8316 (FAX兼用)

FAX : 0298-38-8199

E-mail : arachis@niaes.affrc.go.jp

日本線虫学会ニュース第17号

ニュース編集小委員会

荒城 雅昭 (農環研)

小倉 信夫 (森林総研)

入会申し込み等学会に関するお問い合わせ
は学会事務局

〒305-8666 茨城県つくば市観音台 3-1-1

農業研究センター 線虫害研究室まで

TEL : 0298-38-8839

FAX : 0298-38-8837

E-mail : mizu@narc.affrc.go.jp